

令和4年度 東条学園小中学校 学校評価（中間）（教職員）

4・・・よくあてはまる 3・・・ややあてはまる 2・・・あまりあてはまらない 1・・・まったくあてはまらない

評価の観点	評価項目	実践目標と成果		評価
生きては たらく学 力	基礎基本 の確実な 定着・学 びに向か う力	実践目標	授業目標(めあて・ねらい)を児童生徒と共有し、自らの学習活動の「振り返り」を行うなど、児童生徒のつまづきの解消や系統性を重視した授業を実施する。	教職員
		成果	授業目標共有及び振り返りが適切に実施されている。各教科におけるステージ間の系統性を「学びのつながり（パトンパス）」とし共通理解をした上で、2学期以降に研究授業を実施する計画を立てられた。	3.0
		課題と 方策	児童生徒のつまづきの解消に向けた授業計画がおろそかになっている。研究授業実施後の事後研修でどのようなつまづきがあるか、予想されるかを検討する。	
	思考力・ 判断力・ 表現力の 育成	実践目標	「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の視点に立った授業改善を図る。	教職員
		成果	授業がどの授業からつながっていて、どの授業へつながるのかを授業者が意識して授業を計画することで、授業者が「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を系統立てて捉えられつつある。	3.1
		課題と 方策	学園生の課題「主体性」「他者とのつながり」をきちんと踏まえた上で授業改善に努める意識が不足していた。指導案や事後研修で課題を踏まえて計画、検討するようにする。	
	ICT活用 指導力の 向上	実践目標	情報モラル教育を充実させ、ICT機器を活用した効果的な授業づくりを進める。	教職員
		成果	1人1台タブレット使用に際し、授業での振り返りや、専門部活動でのアンケート調査など、教科横断的な使用をすることができた。	3.3
		課題と 方策	タブレット使用が効果的である場面についての研修を行い、様々な分野で日常的に使用できるようにICT支援員と協力し、知識を深める。	
他者とつ ながる力 ・ 他を思い やり、互 いに高め 合う心	体験活動 等の充実	実践目標	学園会の中央委員が中心となって、体育大会、学園祭等の学校行事を企画・運営することで、学園生の自治能力を育成する。	教職員
		成果	体育大会では、学園会中央委員が中心となり、企画・運営を担った。今年度は、新演技を取り入れる為に、自分達で内容やルール作りに取り組んだ。	3.4
		課題と 方策	第Ⅰステージの児童と第Ⅱ・Ⅲステージの児童・生徒がつながれる、定期的な活動を取り入れる。	
	道徳教育 の充実	実践目標	自分の問題として「よく考え」、その考えをより深めていくために級友と「議論する道徳」をめざした授業づくりを推進する。	教職員
		成果	ペアトークを実施することで補助発問、中心発問をよく考えられるようになった。発表や振り返り記述に議論して考えた内容が見られるようになった。	3.1
		課題と 方策	より深く議論させるために、児童生徒の発言を拾う、まとめる、そしてそこから問い返す技術の向上が課題である。教材研究時間の確保、板書の工夫に努める。	
	平和学習	実践目標	系統的なつなぐ平和学習を通して、平和の尊さ・大切さを考え、行動する力を育成する。	教職員
		成果	実地で見聞きたことを元に新聞にまとめたり、パワーポイントで他学年に発信したりすることで、戦争の悲惨さ、平和の尊さ等をより実感することにつながった。沖縄と広島というそれぞれの土地で自分達と同年齢の子ども達の戦時中の過酷な実態を知ること、より戦争の悲惨さを実感することができ、行動につなげる意欲につながった。	3.6
		課題と 方策	更に平和な世の中をつくっていく当事者としての自覚が芽生えられるような学習を他教科・他領域と合わせて進める。	
健康な心 身安全意 識	健康や体 力の増進	実践目標	系統的な体幹トレーニングを実施し、体力・運動能力の向上や正しい姿勢を身に付けさせ、けがの予防に努める。	教職員
		成果	授業内での筋力トレーニングなどの取り組みで体力・運動能力の向上は見られたが、児童生徒自身がどの部分を鍛えるために行っているかを意識すれば、もっと向上がみられることが分かった。	3.3
		課題と 方策	授業内で筋肉トレーニングや柔軟運動など様々なトレーニングを取り入れたり、家庭での取り組みを増やして、身体能力の向上を図る。	
	健康な心 身の育成	実践目標	定期的な困ったことカードや教育相談の実施により心のケアの充実に努める。	教職員
		成果	日々、児童生徒が感じている困り感を細かく把握することができた。	3.3
		課題と 方策	各学年の発達段階によって書く内容に大きく違いがあり、一通りの指導法では、解決が難しい。それぞれの学年の発達段階に合わせた指導が必要である。	
	危機管理 の充実	実践目 標	地域、保護者、学校が連携し、見守り活動の配置図や110番の家の設置を行い、通学路の見える化を図り、危険予測ができ、自分の命を守る能力を身に付けさせる。	教職員
		成果	110番の家の設置が終わり、通学路にのほりが上っており、通学路の見える化が図れた。また、それに伴う教師の指導により、児童生徒が自らの命を守る能力の向上につながると思われる。見守り隊のピブスもでき、児童生徒も立ち番をして下さる地域の方々を認識しやすくなった。	3.4
		課題と 方策	通学中に自転車での単独事故が年度初めや悪天候時に発生することがあった。そのため、横断歩道の正しい渡り方を長期休業期間前などに適宜行い、児童生徒へ周知する。また、事故が多い道路や危険な通学路での自転車の乗り方について児童生徒へ注意喚起を行う。	

心通う集団づくり、積極的な生徒指導	教師の協働した指導や支援	実践目標	SCやSSWを含めた校内学園生の支援体制（ケース会議や学年層会議）を充実させ、福祉・医療機関等と積極的な行動連携を図る。	教職員
		成果	SCやSSW、生活補助員、担任等と情報交換をすることができた。	3.3
		課題と方策	2学期より、SCやSSW個々との相談ではなく、月1回、水又は木曜日に情報共有をする時間を設定し、1学期よりもさらに情報共有や対策を練る。	
	児童生徒の内面理解と人間関係づくり	実践目標	QUテスト等を活用して、児童生徒の内面理解に努め、構成的グループ・エンカウンター等を活用した人間関係づくりを計画的に実施し、安心できる学校づくりを進める。	教職員
		成果	QUテスト（4～9年）、分析シート（1～3年）を基に各担任が分析し、要支援群の児童生徒に対する対応を具体的に相談できている。ペア・グループ活動を取り入れ、交流の機会をもつことが児童生徒自身の人間関係づくりを助けることができた。	3.4
		課題と方策	要支援群の児童生徒について、全職員で共通理解して対応できるように会議や書類報告にとどまらず、変化があれば折に触れた報告をし、全職員の連携を図るよう努める。	
自己管理能力の向上	実践目標	完全ノーチャイムを実施し、時間を常に意識させ、自己管理能力の向上を図る。	教職員	
	成果	児童生徒が時間を意識するようになり、自分達で時間を守ろうとすることで、「立志」の基本となる力を養うことができた。	2.9	
	課題と方策	昼休みが終わった後の掃除の時間の始まりが前期・後期ともに曖昧になっている。時間通りに掃除場所に到着していない児童生徒に声掛けを行う。		
特別支援教育	一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援	実践目標	個別の教育支援計画等の見直しを実施し、本人・保護者の願いを中心に据えてライフステージに応じたきめ細かく適切な支援を行う。	教職員
		成果	児童・生徒の実態把握に努め、障害の特性を理解した上で、個別の教育支援計画を作成し、本人・保護者の願いを中心に据えてライフステージに応じた適切な支援を提案して実行することができた。	3.2
		課題と方策	さらに職員や保護者、児童生徒の特別支援教育の理解と啓発を進め、校内支援体制を充実させる。	
	切れ目のない生徒支援	実践目標	加東市発達サポートセンター「はびあ」と連携した切れ目のない児童生徒支援・家庭支援をきめ細かく適切に行う。また、デリコラ（巡回相談）等を積極的に活用する。	教職員
		成果	加東市発達サポートセンター「はびあ」と連携し、発達相談等を実施できた。また、指導内容を生かした切れ目のない児童生徒支援・家庭支援をきめ細かく行うことができた。	3.3
		課題と方策	デリコラ（巡回相談）等を積極的に活用し、専門家の助言を受ける機会を設け、さらに充実した支援につなげる。前期と後期の連携を図るために、お互いの教育課程を理解するとともに、児童生徒間の交流を進めるための手立てを探る。	
地域に開かれた学校づくり	地域との協働	実践目標	地域での作品展示、地域行事やボランティア活動への参画など東条地域の担い手を育む教育を推進する。	教職員
		成果	9月より、東条地域3カ所において校外作品展示を行った。また、天神地区花植え、東条地域子ども夏まつり等に多くの子どもが参加した。	3.6
		課題と方策	子どもたちが、自主的に地域行事やボランティア活動に参加していくように推進していく。地域・PTAとの連携し、地域行事の情報を収集し、発信していく。	
	地域との協働	実践目標	学校運営協議会、地域学校協働本部を両輪として、学園生の健全育成を中核に、学校と地域が一体となって協力しながら教育活動を行う。	教職員
		成果	コーディネーターが機能し、学校運営協議会、地域学校協働本部が両輪となって「通学路の見える化」が行われた。	3.6
		課題と方策	地域住民の参画について、促進を進めていく。そのために、教師自身が地域の出向くことを心がける。	
働きやすい職場環境づくり	児童生徒と向き合う時間の確保	実践目標	学校の業務内容を見直し、効率化を図ることで、児童生徒と関わる時間を確保する。	教職員
		成果	ICTを活用した教職員の連絡システムを確立したことで、学年総務の打合せ回数減った。	2.9
		課題と方策	全教職員が共通理解できていないこともある。学年総務等から教職員への連絡を徹底するために、ICTの活用方法を探る。また、朝の職員打合せなどを効率化し、意思疎通と共通理解を推進する。	
	定時退勤日	実践目標	留守番電話の設置や毎週1回の「定時退勤日」を保護者等へ学校だよりや様々な機会を通して周知することにより、教職員の共通理解のもと働き方改革の確実な実施を図る。	教職員
		成果	保護者や地域の方に、留守番電話の時間帯が浸透してきた。その時間帯の電話対応が減少した分、別の業務に時間をかけることができていた。定時退勤日は、教職員同士のお互いの声かけと意識が高まってきており、実施できた。	3.2
		課題と方策	生徒指導や保護者対応等があった場合や緊急の対応で完全実施できない日があった。臨機応変に別日に設定するなど推進していく。	
ノー部活デー	実践目標	部活動の練習計画表を校内に掲示することで、学園生や教職員に周知を図り、「ノー部活デー」を確実に実施するとともに、教職員のワーク・ライフ・バランスの保持に配慮する。	教職員	
	成果	「ノー部活デー」と定時退勤日を合わせることで、定時退勤が円滑に行われた。前期の教師が部活動に参加することにより、主顧問の負担が少し減っていった。	3.6	
課題と方策	少しでも多くの教職員で実践できるように今後も呼びかけを行う。			